

食とは(四) エレガントな化学物質 鈴木齊観^{せいかん} (齊観堂鍼灸・気功治療院院長)

自らの食を含めた生活を省みず、「健康に良い」と特定の食品に走る人が多いのに比べて、農薬や添加物等が使われた、不自然で不健康な食品を避けようとする人はまだまだ少ない。化学物質による影響が食べてすぐ現れるものではなく、期間を経て、しかも他の要因と重なって現れるものであるからだろう。

化学物質が蔓延している現代にあつては、旬を食べ(身土不二)、食材をまるごと食べよう(一物全体食)という事がそのままでは通用しなくなっている。母乳にさえもダイオキシンが含まれる時代である。食を含めた生活の中にひそむ化学物質の情報が必要である。

私は日本子孫基金の機関誌『食品と暮らしの安全』を読んでいる。

最近で関心をひいたのは、野菜・果実から作られていると思われているソースの原材料で、糖類(砂糖など)がかなり使われ、一番多いものもあるにも関わらず、日本ソース工業会が加工品は重量の多い順に書くというJASに違反して「野菜・果実、醸造酢、糖類、食塩、香辛料」の順で表示する申し合わせをしていたという記事。しかもタイでは原材料の%表示を義務付ける画期的な制度があり、そこでは明らかになっていたという。これが最初に載ったのは今年8月号だが、12月号によれば、この指摘によって農林水産省が動き、表示が変わるとのことだ。

最新号(12月)では「不自然な合成油・花王のエコナ」という記事がある。植物油の代わりに使え、「脂肪が付きにくい」と宣伝されているエコナ。ところが記事によると、エネルギーとして消費されなければ、最終的には体脂肪となり、肥満予防効果はあまりないという。そしてエコナの成分は植物油にわずかに含まれているが、わずかなものを植物油と同じように多量に使って大丈夫か、とある。

科学は決して中立ではない。大企業側の科学者はもっともらしく、あるいは自分自身も信じ込んで、商品の有用性や安全性を科学的に説明する。例えば、花王のHPではエコナでは食後の血中中性脂肪が上昇しにくいとまでは丁寧に説明しているが、その後の事は載っ

ていない。そういう誤魔化しを見抜く為にはやはり科学的知識のある専門家の力が必要だろう。そういう意味で市民側の科学者が協力している日本子孫基金のような団体は貴重である。

一般の新聞などでは商品の有用性の記事が多く、安全性にかかわる記事が載っても、それは日本子孫基金などの民間団体が問題にし、やや事が大きくなった段階で初めて載る場合が多い。

12月3日の中日新聞夕刊に載った「遺伝子組み換え 利点も知って」という記事はひどかった。「遺伝子組み換え農産物の作付けが、海外で大幅に拡大している。一方で日本の消費者の拒否反応はいぜん強い。政府系の研究機関などは最近、イメージ向上作戦に力を入れ始めた。」という、この書き出しで、この記者が遺伝子組み換え農産物の推進側の立場にしていることが分かる。後に続く本文は、推進側の発言をたどってPRの動きを紹介している。

「百パーセント安全といえる食品はない」「人々の代表的な意見は、虫が食べて死ぬようなものを食べたくないということ」「昆虫の消化管の受容体に働きかけて、虫を下痢から餓死させる。人にはその受容体がない」と推進側の発言を紹介しているが、安全性に対する疑念や関係する事件の話は一切出てこない。

最後に「記者のつぶやき」と題した部分で、遺伝子組み換え農産物と原子力発電とは、どちらも技術が従来より「エレガント」と書いているのは、この記者の見識が分かる一方、いいところに気がついてもいる。

この二つの「エレガント」な技術は、科学者が頭の中で知っている範囲内で問題ないと思いついでいるだけで、未知で制御できない領域の技術であり、しかもそれが推進された場合の人類への影響は極めて大きいということだ。

化学物質を蓄積した私たちの体は死んで土となり、未来の命を育む糧となるどころか、毒となり、子孫を脅かす。身土不二の為す所以である。(2002年12月大雪)

意識して避けなければ、
化学物質だらけ・★

